



倉本聰
コレクション
26

ひかりの中の海

scénario
1971

倉本聰

倉本聰
コレクション
26

ひかりの中の海

scénario
1971 倉本
聰

KURAMOTO SOH COLLECTION 26

ひかりの中の海

1985年3月 第1刷

著 者／倉本聰^{くらもとそう}◎

発 行／山村光司

発行所／株式会社理論社

東京都新宿区若松町15-6

電話 (03)203-5791

振替 東京9-95736

1985 Printed in Japan／0393-91626-8924

誠和印刷／島田製本

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。

倉本聰作品

ひかりの
中の海

日本テレビ
大映テレビ室 制作
昭和46年4月26日〜7月12日放送

装画・題字

小野州一

装幀

杉浦範茂

I

文子「ハイイ!!」

急いで玄関へ。

同・玄関

電報受取る文子。

電報配達夫去る。

文子「ご苦労さまでした!」

前掛けで手を拭き、電報を開く。

小樽市街

電報配達夫の自転車が走って行く。

画面に文字が——「北海道 小樽

昭和二十七年三月」

電報

「アス、一三ジ 一〇、オタルツク」リヨウイチニモ
アイタシ」チチ」

同・住宅街

小さな一軒の家の前に止まる自転車。

配達夫、中へ入る。

表札——「三上」とある。

同・台所

夕食の仕度をしていた三上^{みかみ}文子^{ふみこ}(三十四歳)ふり返る。

声「三上さん電報!」

玄関

文子——。

小学校三年の修、のぞく。

修「誰から?」

文子「東京のおじいちゃま、明日みえるって」

修、電報をとって見る。

文子、台所へ駆けもどる。

文子の声「修ちゃん!」

修（顔あげる）

文子「の声」「ちよっとお留守番しててね、母さん電話かけに行ってくるから」

同・表

とび出す文子。

雪の残った道を小走りに走る。

大黒屋酒店

その看板。

同・内

電話を借りている文子。

文子「あ。日和山燈台ですか？ 神威岬燈台の三上の家内

でございます。いつもお世話になっております。アノ、毎度すみませんが今度の無線連絡は何時でしょう。

——四時。——大変恐れ入りますがそのとき主人にちよっと言づけを」

日和山燈台・事務所

電話をききつつ、メモとる所員の岡。

岡「一ツ、東京からお父様がみえるので、明日そちらへ行かない。

一ツ、煙草と酒は次の休暇までもつかどうか。——次の休暇っていつです。——明後日。そんじや大丈夫でしょう。

一ツ、明日、特許外出が認められないか——と」

壁にかかった地図を写し出すカメラ。小樽——日和山

——積丹岬——神威岬と移動して、

神威岬の燈台マークにズームイン。

岡の声「（つづいてかぶる）以上ですネ、復唱します。一ツ、東京からお父様がおみえになるので——」

神威岬燈台マークのクローズアップ。

いきなりたたきつける波の音。

神威岬燈台

荒磯の突端にそそり立つ。

波音にまじって、かすかな声がしのび込む（東北なまりでありたい）。

「電標カムイ、電標カムイ、電標カムイ。こちら電標シャコタン、電標シャコタン、電標シャコタン。感度いかがですか」

燈台・正門

「神威岬燈台」の標識。

画面に文字が——「神威岬航路標識事務所」

田所の声「こちら電標カムイ、電標カムイ、感度良好ですどうぞ」

同・事務所

無電を受けている海上保安官、田所昌平（二十七歳。作業服）。

声「当方から業務上連絡事項はございません。どうぞ」

田所「当方からもございませんどうぞ」

声「田所さんかね、どうぞ」

田所「そうですよ、どうぞ」

声「小樽の三上さんのカアちゃんから、三上さんに伝言があるんだがネどうぞ」

田所「おききますどうぞ」

声「エエト——（読んでいるらしい）神威岬長三上了一サマ、——何つう字だコレ——自分で書いてわかんなくなつた——ラー。ラ？——ああ一ツだ！ ハハハ、一ツ、ええと東京から、カアちゃんの父ちゃんが——

カアちゃんのトーチャン!? どういうことだコレ」
包丁の音がしのび込む。

所長官舎

トントントンとリズムカルな包丁の音。

ゆっくり室内を移動していくカメラ。

部屋いっぱい干された洗濯物。

ダルマストーブ。

台所で、トントントンと大根を刻んでいる所長、三上^{リキイチ}了一、三十七歳。

大根をまとめて鍋に放り込む。

ノックの音にふり返る。

了一「はい！」

技術労務員佐伯平吉（五十七歳）入る。

平吉「小樽の奥様から伝言です」

了一「ああどうもどうも」

メモを受取る。

読む。

平吉「所長さん」

了一（読んでいる）

平吉「何も料理なんか自分でしなくても、うちで一緒に食

つてくれりやいいのに」

了「あ！」

平吉「は？」

了「来られないっていやがる！ 女房のやつ」

平吉「はア」

了「約束しといたのに——頭にくるよなア」

平吉（笑う）

了「（ジロツと見て）何——」

平吉「あ。いえ」

了「こういうの नाहीですよ。——平さん」

平吉「は？」

了「煙草後だけあったかね」

平吉「もうほとんどないですが」

了「うん」

目ざまし時計鳴る。

了一步いて、音を止める。

了「冷えてるか」

平吉「まあまあです」

了「頭にくるよなア」

平吉（笑いかみ殺している）

燈台・表

雪片が舞っている。

出てきた了、寒暖計を見る。

四方に指をあげ、視界を確認する。

事務所

了「入る。」

日誌をつけていた田所、顔をあげる。

了「ご苦勞さん」

田所「異常なしです。電球一個とりかえました」

了「ああ、ありがとう（気温を書き込む）」

田所「冷えてるでしようちよつと」

了「うん。——点燈何分だ」

田所「十七時十七分です」

了「ウン」

田所、茶をいれる。

田所「伝言きいてくれましたか奥さんの」

了「ああどうも。あのバカ明日、来られないっていやがる！」

田所「（笑いかみ殺して）だそうですね」

了「（こういうのはないですよ。当てにしてたのに）」

田所「はあ」

了「「だいたいあのバカ、無電を私用に使いすぎる」

田所「（笑って）しようがないですよ、ほかに通信の方法がないんだから」

了「何が特許外出をとれだ！」

田所「いいじゃないですかとってくださいよ。せっかくお父さんみえられるのに」

了「結構ですよ。わざわざとらなくたって明後日は公休日だ」

田所「はいお茶」

了「ああどうも。いいかな」

田所「何です」

了「いや、——明後日、小樽へ行っちゃって」

田所「どうぞどうぞ。ついでに特外で一泊してきてください」

了「ありがと。うまいなこのお茶」

田所「こないだ奥さんが札幌で買ってきたやつですよ」

了「「東京のか？」

田所「そうですね（缶を見る）そうです」

了「「ちがうなやつぱり」

煙草をくわえる。

田所、火をする。

了「一、もらいかけ、

了「「あ」

田所「え？」

了「「煙草ないんだ」

田所「（笑って）まあいいじゃないですか」

了「「いや、こりやうちのカミさんの義務違反だ。シケモクでがまんする」

新しい煙草をしまい、灰皿からシケモクを探す。田所笑って、

田所「大丈夫ですよそんなことしなくても」

了「「（シケモクに火をもらって）もつかね」

田所「煙草ですか？」

了「「ああ。女房が明日持ってこないとすると、（カレンダーを見て）——俺が小樽行って——しあさつてになるぜ」

田所「（笑う）何とかありますよ。たまには替煙もいいでしょう」

了「「それもいかないぜ」

田所「いざとなったら映子に余別まで買いにやらせます」

了「「いやそりや無理だ、映子さんの足じゃ。おッ（立つ）」

点燈だ！」

田所（も立つ）

電源ボックス

電源が入れられる。

らせん階段

静かな冷えたその空間に、モーターの音が低くうなりだす。

燈室

点燈し、ゆっくり回転を始める回転燈器。

音楽——静かに流れ込む。B・G（次のシーンのバックに流れる）。

上がってきた了一、回転燈器の下のボックスをあけて点検する。

燈台全景

光を放ちはじめたその姿。

同・内庭

天体望遠鏡をすえて、遠くをみつめている田所。出てくる了一。

寒風と、チラホラ舞っている雪。

了一「見えるか？」

田所「まだらしいですね」

了一「（時計を見て）も少し待ってみろ」

田所「ええ」

二人、寒さにふるえて足ぶみを開始する。

足ぶみしつつ、以下——

了一「こないだ」

田所「え？」

了一「行っただかい？——例の、小樽の」

田所「花園町ですか」

了一「黒猫」

田所「ああそれが」

了一「何」

田所「いなくなっちゃったですよ所長のねらってたの」

了一「ねら——。変な言い方するなよ」

田所「いい、いいっていったじやないですか」

了一「どれ」

田所「あ。トボケテ」

了「二人いただろう」

田所「ああここにホクロのあるほう」

了「松原さんか」

田所「松原さんてんですか？ あれ」

了「ミツちゃんて娘だろ？」

田所「ああミツちゃんミツちゃん」

了「ちよつと小肥りの」

田所「そうそう」

了「原節子に似てるの」

田所「原節子に似てますかア!？」

了「似てるでしょうちよつと。ここらの感じ」

田所「そうかなア」

了「そうですよ」

田所「惚れた弱身つてやつじゃないですか？ 僕の感じじ

やむしろ笠置しず子」

了「何いうのあんた！ 原節子と笠置しず子はちがうで

しょう！」

田所「ちがいますよ、だから」

了「原節子の感じですよ！」

田所「そうかなア」

了「そうですよ」

田所「あッ（足ぶみを中止）」

了「見えたか（も、足ぶみを止める）」

田所「見えました」

了「一、望遠鏡をのぞく。」

田所、手をかざす。

はるか夕暮れの半島の突端に、間隙を置いてチカツと

光る灯。

了「腕時計をチラと見る。」

了「十七時十九分、積丹、点燈か」

ふたたびチカツと光る積丹岬燈台の灯。

燈台業務日誌（夜）

了「一、書き込む。」

了の声「燈台業務日誌。十九時三十分。天気、小雪。気

温、マイナス〇・五度」

燈台

闇の中に光彩を放ちつつ廻っている。

その光の中に舞っている小雪。

了の声「（つづく）視程五キロ。風向、北西。風力、――」

突然、積丹の声が入る。

声「電標カムイ、電標カムイ、電標カムイ」

事務所

サツと無線機に立つ了一、スイッチを入れてレシーバーをあてる。

チラと時計を見る。

声「こちら電標シャコタン、電標シャコタン、電標シャコタン。感度いかがですか」

了「「こちら電標カムイ。よく聞こえますどうぞ」

声「第一管区海上保安本部より通達、十九時二十分気象庁発表、後志支管内に濃霧注意報が出されました。くり返します。十九時二十分後志支管内に濃霧注意報発令どうぞ」

了「一、窓、ごしに外を見る。

門燈がまだはつきりと見える。

了「了解。電標カムイ十九時三十分、現在天気小雪、気温マイナス〇・五。北西の風、風力1、視界は今のところ約五キロですどうぞ」

声「了解。今度は十八時〇〇分臨電お待ちします。三上さん、特許外出はいいのかねどうぞ」

了「そんなもんとれないと女房にお伝えください。なお、

恐縮ですが電標日和山の岡さんに、女房から連絡ありましたら明後日の公休には小樽へ行くと伝言願います。くれぐれもついでで結構です。どうぞ」

声「ついででなく伝えます。そのほかカアちゃんに伝言はございませんか。顔が見たいとか、愛してるとか、どうぞご遠慮なくいつてくださいどうぞ」

了「（憤然）そのような歳ではございせんどうぞ」
声「そのような歳ではない、了解。伝えます。ほかに――、

ああ、煙草の在庫は大丈夫かねどうぞ」

了「「当電標にはただ今、光二箱しか残っていません。小生現在シケモク中、どうぞ」

声「深くお悔み申し上げます。電標シャコタン煙草あり余つてケツの穴からも煙はいます。では十分お体に気をつけて。次はそちらからの連絡お待ちしています」

了「はい。それではどうぞご苦労さんでした。さようなら」

声「さようなら」
了「（切る）畜生！」

同・内庭

了一出る。

海を見る。

海鳴り。

平吉出てくる。

平吉「気温がだいぶ上がってますね」

了「濃霧注意報が出たそうだ」

平吉「ひと荒れ来るかな」

了「余別の灯が消えたな。——視界三キロか」

燈台の光芒。

海鳴り。

*

霧

朝まだき神威岬燈台の、白い屋舎を這いはじめている。

田所の官舎

目ざまし時計が五時を指して鳴る。

田所の手がのびて目ざましを止める。

間。

ひどい顔の田所、顔をあげる。

時計を見る。

首をのばす。

部屋の隅に眠っている赤ん坊夕子（零歳）。

勝手場から茶を運んでくる妻映子（二十三歳）。

田所、絶望的な顔をふるい立たして、バツと起きる。

映子「霧、出てるわよ」

田所、窓から外をのぞく。

門燈がボーツとかすんで見える。

渡り廊下

田所、作業着を着、ふるえながら階段を上がる。

低くきこえてくるテネシーワルツ。

事務所

田所入る。

田所「おはようございます。ご苦労さまです」

了「おお」

田所「濃霧注意報当りましたね」

了「視界三百だ。霧信号出したほうがよさそうだな」

田所「やりましょう。どうぞ休んでください」

田所出て行こうとする。そのとき、

声B「電標カムイ、電標カムイ、電標カムイ」

田所と了一、チラと時計を見、無線機へ。

田所「臨時ですね」

声B「こちら電標シャコタン、電標シャコタン、電標シャコタン。感度いかがですか」

了一「こちら電標カムイ、感度良好、どうぞ」

声B「霧の状態、そちらいかがですかどうぞ」

了一「電標カムイ、現在視界約三百メートル。ただ今霧信号出そうとしていたところですよぞ」

声B「了解。ええ、第一管区海上保安本部よりただ今連絡入りました。昨夜余市港入港予定の漁船が一隻、現在になつても帰着していないそうです。ええ、——何か情報ありましたらお伝えください、どうぞ」

了一「せっかくですがただ今情報何もありません。神威岬付近の海上は現在、うねり1、風浪3、という状態です。なお、何か情報入り次第お知らせします。当該漁船の船名、特徴お教えくださいどうぞ」

声B「——」
了一「電標シャコタン。電標シャコタン」

声B「——」
了一「電標シャコタン。こちら電標カムイ。感度いかがですか。電標シャコタン」

声B「失礼しました。感度良好です。漁船の船名、特徴を

申します。第五余市丸××トン。乗員××——」

霧笛舎

スイッチがガツと入れられる。

うなりだすモーター。

別のスイッチが入る。

油さす田所。

鳩時計式鎖をひき下ろす了一。

ギリギリと作業を開始する鹵車。

燈台

霧の中を照らしている燈台の灯。
いきなり霧笛がボーツと鳴る。

同・内庭

出てくる二人。

海を見て立つ。

霧。

海鳴りの中に等間隔で、ボーツ、ボーツと鳴りつづける霧笛。